

児童を対象にした「四胡」演奏に演芸の手法を取り入れる試み —児童にとって未知の楽器との接点をいかにつくるか—

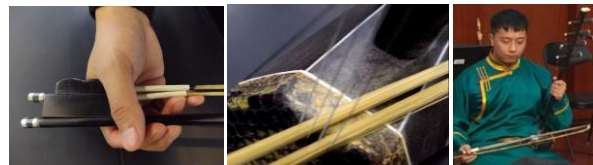
○アスハン（阿斯罕）¹・芳賀 均²

(1: 北海道教育大学旭川校大学院生 2: 北海道教育大学旭川校)

キーワード : モンゴルの音楽, 四胡, 民族音楽の教材化, 演芸の手法

1. はじめに一本実践の目的

児童にとって未知の楽器との接点をいかにつくるかということに関し、演芸の手法を取り入れることが興味関心の向上に与える効果について、示唆を得ることを目的とする。



【図1】弓の持ち方 【図2】弓の通し方 【図3】演奏姿勢

2. 実践の方法と内容

筆者は先の実践¹⁾²⁾において、楽器演奏時に演芸の手法を取り入れることによる効果を確認してきた。しかし、それらはバイオリンやホルンといった、教科書に掲載され、授業でも通常取り扱われる楽器に関するものであった。本実践では、知名度の低い「四胡（しこ）」を取り上げ、演奏時の演芸の手法の導入に同様の効果が得られるかを確認する。

なお、モンゴルの音楽を取り上げる理由としては、「東アジアの音楽を取り入れることの効果」の先行研究³⁾を踏まえ、日本の伝統音楽と共通点が多いことに着目したことによる。それにもかかわらず、現状では、モンゴルの音楽は我が国の音楽科教科書における取り扱いが多いとはいえない。これまで筆者がその教材化を考えて取り組んできた試みでは、演芸の手法を取り入れてきたものの、それは演奏時ではなく、複数の演奏者が解説を行う際の対話を漫才のように行うといった方法であった。なお、過去の実践においてな楽器である「馬頭琴」は取り上げ済みのため、本実践では「四胡」を用いることとした。

3. 実践と結果

四胡は、内モンゴルの楽器であるが、音楽事典等でその説明を探しても、詳しく書かれたものを見つけることが難しい。この楽器は、中国語では「スーフー」と発音する胡琴（二弦の胡琴は二胡と称し、日本でも有名である）の一種である。演奏時は、左の足の上に置き、左手で棹を支え、人差し指・中指・薬指・小指の第二関節の腹で弦を押す。このとき、親指は内側で弦に触れる。弦は、二胡と同様の高音弦と低音弦の対を二つもち（内弦から順にD-A-D-Aと調弦する）、それぞれの間を二本に分かれた弓の毛（一本の弧に対して馬の毛の束が

二筋ある。【図1】参照）が通る（【図2】参照）が、二胡と同様に弓の毛は二本の弦の間（1・2弦の間と、3・4弦の間）を通す。内弦側に押し付けて弾くとD弦が二本、反対側だとA弦が二本鳴る、同音をユニゾンで演奏する（【図3】参照）形だが、理由等に関しても、謎が多い。

そうした、児童と距離のある楽器を児童に提示していく際に、「四胡の演奏および提示時の演芸の手法の導入」を試みた。実践前後に、児童を対象に、四胡および四胡の演奏に関わるアンケート調査を行い、児童の四胡に対する興味関心の変化を確認した。

その結果、「演芸の導入により興味関心を劇的に高めた状態から解説を開始し、徐々に本来の演奏のよさを聴衆が求める状態に至った時機に正式な演奏に出会う」という展開が効果的であることが分かった。

児童が本物の音楽に触れることは重要であるが、それを受け入れる素地が育っていなければ、また、児童自身が聴きたいという意思をもっていなければ、十分な知覚・感受が行われるとはいえない。この点の改善に演芸の導入が効果的であることが示唆された。

文献

- 1) 芳賀均・早川元啓・久保允人(2019)「音楽におけるアウトリーチが教員養成に与える効果と演芸を取り入れる試み」『へき地教育研究』73。
- 2) 千葉圭説・大野紗依・芳賀均(2020)「金管楽器の説明における模型使用の効果について」『北翔大学短期大学部研究紀要』58。
- 3) 村井宏志・坂本麻実子(2016)「小学校音楽科における東アジア民族音楽鑑賞指導での教科書活用の提言—教師の指導力の向上を目的として—」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要教育実践研究』11。